

ヒューム道徳哲学における時間について

——ヒューム的な「時」を求めて——

Time in Hume's Moral Philosophy:
An Essay on Humean Theory of Time

奥田 太郎

Taro OKUDA

要 旨

本稿では、デイヴィッド・ヒュームがその道徳哲学において時間をどのように位置づけていたかについて、『人間本性論』での議論を以下の手順で分析することで明らかにする。(1) 主に、ヒュームの知覚論に基づく時間をめぐる議論について、時間の観念に関するもの、および、時間が心に及ぼす影響に関するものの両面から要点整理を行ない、ヒューム哲学における時間の理論的基礎を明確にする。(2) ヒュームの道徳論、とりわけ、統治論、所有論、コンヴェンション論における時間の位置づけを確認する。(3) 以上の議論を踏まえたうえで、道徳哲学あるいは倫理学におけるヒューム的な「時」についての現時点での見通しを提示する。これらの試みを通じて、ヒューム的な「時」に関する倫理学的研究に足がかりを与える。

はじめに

時は金なり、されど、時は人を待たず。私たちの人生において、おそらく時間ほど重要なものはない。世界を理解するうえでも、よき生を送るうえでも、時間というものを度外視して事足りることはあり得ないだろう。実際、時間に関する哲学的な探究は古来様々な仕方でも試みられてきたし、また、現代においては、科学的な研究成果を踏まえたうえでの時間の哲学が盛んに論じられてもいる¹⁾。時間という主題の興味深いところは、そこに含まれる争点が多様であり、古今にわたる議論の進展とて必ずしも単線的なものではないという点にある²⁾。

1) 古代から現代までの時間の哲学の重要争点を整理したものとしては、Dyke & Bardon 2013 が参考になる。

2) 時間に対する探究アプローチの多様性については、山口大学時間学研究所が監修している一連のシリーズ（山口大学時間学研究所 2015 および 2017）を参照されたい。

時間という巨大な主題のうち、本稿が関心を寄せるのは、道徳・倫理と時間の理論的な関わり³⁾、とりわけ、18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームがその道徳哲学において時間をどのように位置づけていたか、というかなり限定された部分である。しかしながら、周知の通り、ヒュームの哲学的洞察は、現代倫理学における議論の基盤の幾つかを提供しているため、倫理学における時間の問題を考えるうえで、ヒューム自身がその道徳哲学のなかでどのように時間を扱っているかを改めて捉えておくことは、現代的な議論の根本的な捉え直しが必要となった場合に備えるという重要な意味をもつだろう。他方で、哲学的なヒューム研究においても、認識、情念、道徳を包括的かつ連続的に論じた『人間本性論 (*A Treatise of Human Nature*)』でそれぞれ時間についてどのような議論が展開されているのかを確認しておくことは、ヒュームの議論をより適切に解釈するために有益である。実際のところ、ヒュームの時間に関する研究はそれほど多くないうえ、関連する研究の焦点はそのほとんどが、無限分割可能性や人格同一性などをめぐる認識論上の問題に当てられており、道徳哲学の観点から論じられたものはほとんど見当たらない⁴⁾。そこで本稿では、(1) ヒューム哲学における時間の理論的基礎、および、(2) ヒューム道徳哲学における時間の位置づけを確認した後、(3) 倫理学におけるヒューム的な「時」について私自身の解釈を提示することで、ヒューム的な「時」に関する倫理学的研究の足がかりとしたい。

1. ヒューム哲学における時間の理論的基礎

1-1. 知性論における時間

時間に関するヒュームの基礎理論は、『人間本性論』第1巻第2部「空間および時間の観念」において提示されている。『人間本性論』第1巻「知性について」では、主としてヒュームの認識論が展開されており、連合原理によって様々な動きを見せる印象と観念から成る知覚の振る舞いが分析的に論じられている。ヒュームによれば、最初に私たちの心に生じる印象が、その勢いと生起の度合いが下がることで写しとしての観念となる。したがって、私たちの心に生じる観念はすべて、その出自となる印象をもつはずである。たとえば、現在私が記憶のなかで思い浮かべる昨夜のカレーの味は観念であり、この観念は、昨夜食べたカレーの味の印象をその存在の出自として有する。では、時間の観念は、対応するどのような印象をもつのだろうか。これについてヒュームは、次のように述べる。

時間の観念は、観念と印象、また反省の印象と感覚の印象を含む、あらゆる種類の知覚の継起から生じるので、空間の観念以上に多様な観念を包括しながら、想像力においては、確定した量と質を有するある特定の個別的観念によって代表される、抽象観念の一例となるであろう。(T 1.2.3.6 / 邦訳 50 頁⁵⁾)

3) 時間と道徳に関する英語圏の現代倫理学における論点について整理されたものとして、Bykvist 2013 がある。

4) 数少ない先行研究として、林 2015 がある。とはいえ、林 2015 での議論は、残念ながら、時間そのものを中心に据えた議論をしているとは必ずしも言えないため、今後の林のさらなる議論展開に期待したい。また、ヒューム道徳哲学における「時」の重要性について簡潔に論じたものとしては、奥田 2015 を参照されたい。

5) 以下、『人間本性論』への言及については、Norton & Norton 編集の著作集版である Hume 2007 を参照し、その

このように、時間の観念は、あらゆる種類の知覚の継起から生じる抽象観念である、と規定される。このことについて、さらにヒュームは次のように詳しく説明している。

われわれは、空間の観念を、見える対象と触れられる対象の配列から受け取るのに対して、時間の観念を、観念および印象の継起から形成するのであり、時間が単独で（知覚の継起を伴わずに）現れたり精神に感知されたりすることは、ありえないのである。（…）われわれは、継起する知覚をもっていない場合には常に、たとえ対象においては実際に継起が生じていても、時間の観念をもっていないのである。これらの現象および他の多くの現象から、時間は、単独でも、あるいは不動で不変な対象に伴われても、精神に現れることができず、常に、変化する対象の知覚可能な継起によって知られる、と結論することができる。（T 1.2.3.7 / 邦訳 50 頁）

このように、時間の観念は、単に対象の側で継起が生じているだけでなく、その継起についての知覚が生じていることで初めて私たちに知られるものである、というのがヒュームの見立てである。私たちが時間を認識する際に、時間は、時点⁶⁾における知覚 A と、時点 $t+1$ における知覚 B という「同時には存在しない諸部分」から構成されるものとして認識されている。A と B は、それぞれ単独では時間の観念を生み出し得ず、A から B への継起があって初めて時間の観念が生み出される、というわけである。たとえば、さきほどのリンゴの印象と現在のリンゴの印象は、それぞれ単独には、リンゴの観念を生み出せても時間の観念を生み出すことはないが、さきほどのリンゴの印象と現在のリンゴの印象の間に表面の色合いに関する違いがあった場合、異なるリンゴの印象が継起したと私たちは捉えることになり、その継起に伴って私たちは、「先ほどから少し時間が経った」という仕方で時間の観念をもちうる、ということである。（T 1.2.3.8 / 邦訳 51 頁）

こうして、時間の観念の出自となる知覚を特定した後、ヒュームはさらに、知覚の継起とは独立に時間のみを想像の上でも考えることができるか、という問いを立て、以下のように応えている。

時間の観念は、他の印象と混在しつつそれから明瞭に区別できるような、特定の印象から生じるのではなく、もっぱら諸印象が精神に現れる際の現れ方から生じるのであり、その際時間は、それら諸印象の一つではないのである。（…）時間は、根源的な別個な印象としては現れないのであるから、或る仕方で配列された、すなわち互いに継起しつつある、異なる諸観念、または諸印象、または諸対象、以外のものではあり得ないことが、明白である。（T 1.2.3.10 / 邦訳 51-52 頁）

要するにヒュームは、上記の問いに否と回答しているのである。このことは、本節冒頭で言及した、「確定した量と質を有するある特定の個別的観念によって代表される、抽象観念の一例となる」（T

箇所については、巻・部・節・段落を T 1.2.3.4 のように表す。さらに、邦訳（ヒューム 1995、ヒューム 2011、ヒューム 2012）の参照ページ数も付記する。なお、訳文は、既存の邦訳を参考にしつつ適宜改められている。

6) 時間を論じるのに、「時点」という時間的な概念を用いざるをえないのは、連合原理に基づいて印象と観念から成る知覚の秩序を捉えるというヒュームの知性論のプロジェクトに内在する、限界概念としての時間という時間のステイタスに由来している。実際、ヒューム自身が、変化と継起を含まない時間の観念について説明する際に、「不動不変の対象を 5 時に見、同じ対象を 6 時にも見る場合」という仕方で「時刻」の概念を持ち込んでいる。

1.2.3.6 / 邦訳 50 頁) というヒュームの言説と符合する。ここで述べられた〈時間というのは、突き詰めていけば、印象の現れ方、あるいは、特定の配置や継起のもとにある個々の観念と印象に他ならない〉という論理は、ヒュームが『人間本性論』第 1 卷第 1 部第 7 節「抽象観念について」で提示したものと同型である。ヒュームによれば、「抽象観念は、その代表の働きにおいてどれほど一般的になろうとも、それ自体においては個別的なものである。心に浮かぶ像は、推論においてまるで普遍的であるかのように使用されるが、一つの個別的対象の像に他ならない。」(T 1.1.7.6 / 邦訳 32 頁) すなわち、抽象観念としての時間は、推論においては普遍的であるかのように同じ用いられ方をするが、その正体は、個別具体的な知覚の継起だということである。この抽象観念論での論理⁷⁾を適用すれば、個々の知覚の継起の観念が、それが習慣的随伴によって結びつけられた「時間」という一般名辞のもとに、想像力によって次々と呼び起こされる、というのが時間の観念である、という仕方で、より精確に捉えることができる。さらに別の言い方をすれば、時間の観念とは、「分離された個別な観念ではなく、単に対象が存在する仕方もしくは秩序の観念」(T 1.2.4.2 / 邦訳 55 頁: 強調は奥田) に他ならない。

こうして時間の観念の核心が明らかにされた。しかし、こうした時間の理解は、私たちが日頃享受している時間経験と整合的だろうか。たとえば、時点 t の知覚 C と時点 $t+1$ の知覚 D の間に何の変化もない (たとえば、何も物がない、光が一切入らない暗闇が広がる小部屋に一人閉じ込められた場合の知覚を想像されたい) とすれば、 C から D への知覚の継起を私たちが経験することはないため、ヒュームの時間論の論理では、私たちは C と D について時間の観念をもてないということになる。しかし実際には、私たちは時点 t から時点 $t+1$ の間の時間の観念をもちうるだろう。この事態をヒュームはどのように説明するのだろうか。

ヒュームによれば、私たちの知覚に関する次の 3 つの関係によって、私たちは、観念について混乱に陥り、変化や継起を含まない時間の観念を形成できるという想像をしがちなのである。その 3 つの関係とは以下の通りである。(1) たとえ特定の印象の継起が妨げられていても、私たちの心のなかでは、その他の印象や諸々の観念の継起が常に生じているので、そうした継起と比較することで、変化のない C と D を隔たった異なるものであるかのように捉える。(2) 私たちは経験上、 C と D の間に (実際には起こらなかった) 数々の知覚の継起が起こりうることを知っている。(3) 変化を伴わない擬似的な持続は、明確に知覚される継起に伴う持続と同程度に、あらゆる性質に影響を及ぼす。これらにより、私たちは、変化や継起を含まない時間の観念をあたかももっているかの如くもつように促されている。これがヒュームによる説明である。

この説明は、『人間本性論』第 1 卷第 4 部第 2 節「感覚能力に関する懐疑論について」のなかで、数多性 (number) と単一性 (unity) の間で引き裂かれる同一性の観念の成立可能性をめぐる、次のように適用されている。

この困難を除去するために、時間すなわち持続の観念に頼ることにしよう。(…) 時間は厳密な意味では継起を含意し、われわれが時間の観念を或る変化しない対象に適用する場合、それは想像力の虚構のみによるのであり、この虚構により、その変化しない対象は、それと同時に

7) 「一つの個別的な観念が一般的となるのは、それが一つの一般名辞に結びつけられることによる。すなわち、習慣的随伴によって他の多くの個別的観念と結びついておりそれらを容易に想像力に呼び起こすような名辞に、結びつけられることによるのである。」(T 1.1.7.10 / 邦訳 35 頁)

存在する諸対象の変化、特にわれわれがもつ諸知覚の変化に与るとみなされるのである。想像力のこの虚構は、ほとんどあらゆる場合に生じる。そして、われわれの前に置かれて、われわれがそこに何の中断も変化も見出すことなく一定期間眺められる、そうした単一の対象がわれわれに同一性の観念を与えることができるのは、この虚構によるのである。(…)ここに、単一性と数多性との中間者であるところの、あるいはより正しく言うならば、われわれがそれを捉える観点に応じてそのどちらでもあるところの、一つの観念がある。そしてこの観念を、われわれは、「同一性の観念」と呼ぶのである。(T1.4.2.29 / 邦訳 232-233 頁)

このように、ヒューム哲学の重要課題としてよく知られた人格の同一性に関する議論を可能にする「同一性の観念」について時間論が重要な位置を占めている⁸⁾ことは、ヒューム道徳哲学における時間の位置づけを解明することを目指す本稿にとって重要な示唆を有する。というのも、たとえば、行為や出来事、行為者の性格特性などの同一性は、まさにそれらを対象にした道徳判断を行なううえで不可欠な観念だからである。

1-2. 情念論における時間

以上で、印象と観念から成る知覚論の枠組みのなかでの時間の観念の成立メカニズムが明らかになったので、次に、時間が私たちの情念や認識に与える影響の傾向についてヒュームの議論を確認しておこう。これについてヒュームは、『人間本性論』第2巻第3部第7節「空間時間における隣接と距離について」および第8節「同じ主題の続き」にて詳細に論じている。論述は次のように始まる。

空間と時間のどちらにおいても、私たちに隣接するあらゆるものは、特有の勢いと生気を持って思念され、想像力に対する影響において他のあらゆるものを凌ぐが、その理由は簡単である。私たち自身は私たちに対して親しく現前しており、自己に関係するものは何であれ、この性質を分け持つに違いないからである。しかし、対象が遠く離れて、この関係の有利さを失っている場合に、それがさらに遠く離れるにしたがって、対象の観念がさらにより生気のない、より不明瞭なものになる。これがなぜ生じるかについては、おそらくさらに詳細な吟味を必要とするであろう。(T2.3.7.1 / 邦訳 176 頁)

先ほどは、時間の観念が成立するに際しての想像力の働きが論じられていたが、ここでは、時間が想像力の働きに与える影響のあり方の解明が問題となっている。ヒュームが着目するのは、(A) 近接しているか隔たりがあるか、(B) 時間的な隔たりか空間的な隔たりか、(C) 現在と過去の隔たりか現在と未来の隔たりか、の三つの隔たりが情念や認識に及ぼす影響力のあり方である。

8) これに関連して、中村隆文は以下のような興味深い主張をしている。「ゆえに、「私」は知覚の集合体であるとする見方は、ヒュームが知覚=主体存在という立場に立っていたのではなく、知覚=非人称的構成要素、という立場に立っていたことを意味している。そこでの主体は決して時間的極小点に閉じ込められたものではなく、そこには記憶(観念)あるいは予覚を有することによって拡がってゆく主体を表しているのである。不可逆的に反復の様相を伴いつつ構成されてゆくヒュームの主体というものは、同一的・不変的な二元論的主体ではなく、厳密な意味から逸脱した形のみ反復されてゆく、拡がりの可能性を有し、それがゆえに不完全な存在者としての主体なのである。」(中村 2004, 39 頁)

まず (A) は、時間についても空間についても「隣接した対象は隔たりのある離れた対象に遥かに優る影響をもつに違いない」(T 2.3.7.3 / 邦訳 177 頁) と指摘される。しかし、その影響のあり方は、それほど単純ではない。(B) についてヒュームは次のように述べる。

時間においても空間においても、隔たりは想像力にかなりの効果をもたらし、そのことによって意志と情念にも影響を及ぼすけれども、空間的に離れていることの帰結は、時間的に離れていることの帰結よりはるかに劣っている。20 年は、歴史が教えることに比べれば、また一個人の記憶が教えることと比べてさえ、確かに小さな時間的隔たりにすぎない。しかし、1,000 リーグ、いやこの地球が許容しうる場所の間の最大の隔たりでさえ、[この 20 年という時間ほど] 顕著に私たちの観念を弱め、私たちの情念を減少させるものか、私は疑問に思う。(T 2.3.7.4 / 邦訳 177 頁)

ヒュームによれば、時間の隔たりは、空間の隔たりに比べると、観念の勢いを弱め、情念の激しさを減少させる点で、より大きな影響力をもっている。隔たりの影響力について、時間と空間とでこうした相違が発生する仕組みをヒュームは、時間の観念を伴う継起する知覚の離散性に求めている。「時間の諸部分は、それらが現実中存在する場合は、同時に存在することは不可能なので、それゆえに想像力において諸部分は分離され、この能力が出来事の長い継起や系列をたどることをより困難にするのである。」(T 2.3.7.5 / 邦訳 178 頁) それによって、「思考における大きな中断」が引き起こされ、さらには観念の弱化和情念の減少を引き起こすわけである。

では、同じ時間の隔たりでも、現在と過去の隔たりと、現在と未来の隔たりとではその影響力に相違はあるのであろうか。これが (C) の問題である。過去から現在、そして未来へと時間の継起があるとき、現在の時点 t から過去の時点 $t-1$ へ推移するよりも、現在の時点 t から未来の時点 $t+1$ へ推移する方が「継起の自然な動き」(T 2.3.7.8 / 邦訳 179 頁) であるので、思考も想像力もそちらの方向に容易に推移する。ヒュームはこのことに関する実例として、歴史叙述における時間順序のありように言及している。(T 2.3.7.6-7 / 邦訳 178-179 頁) 過去から未来への流れが自然だとすれば、未来から現在、そして過去へと遡るのは自然に反することになる。それゆえ、「過去のわずかな程度の隔たりは、未来の遥かに大きい隔たりよりも、観念を抱く作用を中断させ弱めるのに大きな効果をもっている」(T 2.3.7.8 / 邦訳 179 頁) というわけである。想像力はこうした影響を受けやすいため、次のような時間との関わりをもつ。

前述の想像力の特質から、私たちは思考を現在と過去の間におくよりも、現在と未来の間の時点に固定することを選択する。私たちは自分の存在を後退させるより前進させるのであり、時間の自然な継起と思われるものにしたがって、過去から現在、現在から未来へと進むのである。(…) それゆえに、過去と未来における等しい隔たりは、想像力に対して同じ効果を及ぼすわけではない。(T 2.3.7.9 / 邦訳 180 頁)

先ほど指摘した、時間の自然な継起の方向性の問題に加えてヒュームは、私たちの思考の係留点が未来寄りに固定されているがゆえに、そこからの隔たりを考えると、相対的に未来よりも過去の方への推移がより困難だということが帰結する、と考えている。

さて、これで、時間の隔たりが私たちの心に及ぼす影響のあり方の基本が示された。ヒュームは

さらに、対人的な間接情念の一つとしての称賛が、時間とどのような関係にあるかについて、(A)から(C)に対応する形で論じる。ここで問われるのは、ヒュームの定式化(T 2.3.8.1 / 邦訳 181 頁)に従えば、(イ)「なぜ非常に大きな隔たりがあることが、対象に対する私たちの評価と称賛を増大させるのか」、(ロ)「なぜそうした大きな隔たりは、時間における方が空間におけるよりも評価と称賛を増大させるのか」、(ハ)「なぜこのような大きな隔たりは、過去における方が未来におけるよりも評価と称賛を増大させるのか」の三つの問いとなる。

(イ)については、大きいものは私たちの心に明確な喜びと快をもたらす、という直線的な回答が出されている(T 2.3.8.2 / 邦訳 181 頁)が、(ロ)と(ハ)についての回答の論理はいささか複雑である。というのも、(B)の、空間の隔たりに対比された時間の隔たりの影響と、(C)の、未来の隔たりに対比された過去の隔たりの影響はともに、思考を中断させ、観念の勢いを弱め、情念の激しさを減少させる方向で働くものであったにもかかわらず、それに対応する(ロ)と(ハ)への回答は、それらが「評価と称賛を増大させる」という、一見して振れたものだからである。この振れをもたらすメカニズムについてヒュームは次のように指摘する。

私たちを完全に落胆させ意気消沈させてしまうほどではない程度の対立は、みなかえって逆の効果をもち、普段以上の気高さや度量の広さを私たちに吹き込むというのは、人間本性のなかの非常に目立つ性質である。この対立に打ち勝つための力を集めることで、私たちは心を活気づけ、そうでなければ決して味わうことがなかったほどに心を高揚させる。相手の追従は、私たちの強さを無用なものにして、私たちが自分の強さを感じないようにする。しかし、相手との対立は、この強さを目覚めさせて使用するのである。(T 2.3.8.4 / 邦訳 182 頁)

要するに、時間の隔たりは空間の隔たりよりも、また、過去の隔たりは未来の隔たりよりも、思考を妨げ、観念や情念の勢いを削ぐ影響力をもつからこそ、そこに抗う心の高揚をもたらし、それが想像力を「思考と思念の自然な流れに反して進むように」決定づける(T 2.3.8.9 / 邦訳 184 頁)、というわけである。

また、過去の隔たりと未来の隔たりについてヒュームは、自分に連なる過去に存在した祖先と、自分に連なる未来に存在することになる子孫とを対比して、上記の論理から、想像力が祖先に到達するには努力を要し、子孫に到達するには努力を要しない、と述べる。ただし、現在の私たちからあまり離れていない過去の祖先については、想像力の努力は私たちの思考を鈍らせる方向に働き、他方、一定以上離れた過去の祖先については、努力が想像力を拡大し高揚させる。反対に、現在の私たちからあまり離れていない未来の子孫については、努力を要しない容易さによって想像力が補強され、他方、一定以上離れた未来の子孫については、その容易さゆえに想像力の勢いが奪われることになる。つまり、過去の場合は、現在から離れれば離れるほど評価や称賛が高まり、未来の場合は、現在から離れれば離れるほど評価や称賛が不明瞭になる、ということである。(T 2.3.8.12 / 邦訳 186 頁) これらの枠組みを総合して考えれば、人間は、現在と未来の間に自身の思考の係留点を固定させながら、遠い過去をより高く評価し称賛する傾向を有する。このことは、歴史家としても重要な仕事を残したヒューム自身の営みを正当化する論理だと考えることもできるであろう。

以上により、ヒューム哲学における時間の理論的基礎が一定程度明らかになった。ここまで述べたことからわかるように、ヒュームは、宇宙などを含めた存在者全般が構造として実在的に有して

いるはずの物理的な時間を問題にしようとは考えていないようである。ヒュームが明らかにしようとしているのはまずもって、私たちの心理的・認知的な時間であり、私たちの知覚の秩序に関する観念としての時間である。そして、そうした時間が私たちの情念や認識に与える影響のあり方には一定の傾向があることをもヒュームは示している。こうした時間に関する理論的基礎に基づき、ヒュームは、その道徳哲学において時間をどのように位置づけているのだろうか。

2. ヒューム道徳哲学における時間

ヒュームの道徳論が展開される『人間本性論』第3巻「道徳について」では、明示的な仕方では時間が主題になっている箇所はそれほど多くはない。しかしながら、彼の道徳哲学を支える重要な論述、たとえば、道徳判断の対象を行為ではなく行為者の性格とする徳論において、時間というファクターが不可欠な役割を果たしていることは明らかである。本節では、その他、ヒュームの道徳哲学の随所に伏在する時間のファクターについて掘り起こしてみたい。ここで扱うのは、コンヴェンション論、所有論、統治論であるが、前節での時間論との接続が容易な順、すなわち、ヒュームの叙述の順序を遡るような順に取り扱っていくこととする。

2-1. 統治論における時間

ヒュームが自身の統治論を展開するのは『人間本性論』第3巻第2部の後半であり、そのなかでも時間が重要な位置を占めるのは、「忠誠の対象について」と題された第10節である。そこでは、統治者のもとに人々が従うことを正当化する条件が論じられている。そうした統治の正当性・正統性という文脈で、時間の果たす役割が語られるのである。

権力を保持する権利の基礎として私が注目する諸原理の第一は、世界中の確立された統治体のほとんどすべてに権威を与える原理である。つまり、一つの統治の形態、あるいは〔世襲によって継承する〕一系統の君主たちによる、長期の保有である。(…) 時間だけが王たちの権利を確固としたものにするのであり、時間は、人々の精神に徐々に作用して、どんな権威でも受け入れるようにし、権威が正当で理に適ったものに見えるようにする。(…) ある一群の人々に従うことに長く慣れ親しんでしまうと、忠義に道徳的責務が伴っていると想定するわれわれの一般的な本能ないし傾向は、容易にこの方向に向かい、その一群の人々を対象として選ぶ。一般的な本能を生み出すのは利益である。しかし、それを特定の方向に向けるのは、習慣なのである。(T 3.2.10.4 / 邦訳 115-116 頁)

特定の統治体に服従することに正統性あるいは正当性を与えるのは、時間であり、この場合は、長期にわたって権力の座に居続けたことがその統治に正統性を与えるということになる。なぜ「長期の保有」が統治に正統性を与えるのかについて、ヒュームは次のように述べている。

そしてここで言えるのが、同じ長さの時間でも、精神への影響が異なるのに応じて、道徳に関するわれわれの所感への影響は異なるということである。(…) 人は、馬一頭や服一着についての権利なら、ごく短い時間で獲得すると考える。しかし、新しい統治体を確立し、それにつ

いて、服従する側の人々の精神にある躊躇をすべて取り除くには、一世紀でさえ十分とは言い難い。(T3.2.10.5 / 邦訳 116 頁)

統治に関わる権威を人々に納得させるためには、相当な長さの時間が実質的に必要になる。実際の歴史に目をやれば、そうして長い時間の積み重ねを経ない統治体はその正統性を疑われてきたとわかる。したがって、安定した正当な統治を行うために最も求められるのは、時間の積み重ねだということになる。とはいえ、ヒュームは、「長期の保有によって確立された統治の形態がないときには、現在の保有が十分その代わりになるのであり、これをすべての公共的な権威の第二の源泉と見なしてよい」(T3.2.10.6 / 邦訳 116 頁)とも述べ、必ずしも時間の積み重ねを求めているところもある。ここで言われる「第二」という位置づけを少し強めに受け取るならば、同じ領土を長期間統治してきた勢力と、現在統治している勢力の間で正統性・正当性が争われたときには、第一条件である長期間の統治を果たしてきた前者の勢力の権威が後者のそれを上回る、という筋になるのであろう。しかし、「第二」という位置づけがどの程度強いものか、判断し兼ねる部分もある。というのも、ヒュームは別の箇所でも次のようなことも述べているからである。

統治体の根源やそれが最初にどうやって確立されたかを過度の興味を持って探ったりせずに、われわれがたまたま暮らしている国で確立しているのに出くわした統治体に黙って従うこと以上に、実際的な配慮と道徳との両方に合致した格律はない。(T 3.2.10.7 / 邦訳 117 頁)

この格律の有効性を重視すれば、先ほどの勢力争いでは、現在の統治勢力がさしあたり正統性を持ち、そのなかで長期間の統治を求めていくことが必要だということになりそうである。実際、ヒュームは、「時間と慣習が統治のあらゆる形態と諸君主の間のあらゆる継承に権威を与える」という理由で、「当初は不正義と実力のみに基づいていた権力が、時を経るうちに適法で〔服従の〕責務を課すものとなる」ことを認めている (T 3.2.10.19 / 邦訳 126 頁)。最近権力を握った現在の統治勢力が、今後長期間にわたって統治を継続しえた場合、それは正当なる統治なのである。

このように、ヒュームは、統治の正統性・正当性を決めるのは、統治の内容というよりむしろ時間である、と考えていた。この発想は、所有論においても見られる『人間本性論』第3巻全体の通奏低音だと言ってもよいだろう。

2-2. 所有論における時間

ヒュームの所有論における時間は、『人間本性論』第3巻第2部第3節「所有を決定する諸規則について」で明確に位置づけられている。

長期にわたる保有つまり時効が自然に働いて、人に、その人が享受している物についての十分な所有権を与える。人間社会の本性は、非常な精確さ〔を持った決定〕を受け入れないのであり、事物の現在の状態を決定するためにそれらの最初の根源にさかのぼることが、いつもできるわけではない。時間の隔たりが大きい場合は、対象との間に距離ができるので、対象はいわば実在性をなくすように感じられ、あたかもまったく存在しなかったかのように、精神に対して影響を持たなくなるのが常である。(…)それほどに長い時間の経過の後では、同じ事実でも与える影響は同じでない。(…)長い期間を通じた保有は、どんな対象に対してでも権利根

拠をもたらす。しかし、確実なのは、あらゆるものは時間のうちで産み出されるが、時間によって産み出される実在的なものは何もないことである。であるから、以上の帰結として、時間によって産み出される所有は、対象のうちにある実在的なものではなく、所感の産物だと言える。時間が影響を与えると認められるのは、所感だけなのである。(T 3.2.3.9 / 邦訳 64 頁)

ヒュームは、所有決定の規則を実際に執行させる統治のあり方として、立法権力の裁量の範囲を決定するのは、理性の仕事でなく、「想像力と情念の仕事」(T 3.2.10.14 / 邦訳 121 頁)である、と考えていた。換言すれば、誰が何を所有するかという問題は、規則の問題というよりむしろ、個別具体的な知覚の継起、すなわち、時間の問題だと言えよう⁹⁾。そして、統治論とともに所有論でも、時間の長さが重要な役割を果たしていることに注意されたい。ヒュームの道徳論後半では概して、時間の長さが道徳判断に大きな影響をもつことが示されていたわけである。

2-3. コンヴェンション論における時間

互いの行為を制約し合い社会秩序を形成する契機としてヒュームは、コンヴェンションという共同行為を促す装置を提示している (T 3.2.2.10 / 邦訳 44 頁)。「共通利益の一般感覚」とも言い換えられるコンヴェンションは、一度だけでうまくとり結べるわけではなく、まさに、一定の時間の幅のなかで徐々に成立していくものである。そうした時間の積み重ねについて、ヒュームは次のように述べている。

財の所持の固定に関する規則は、徐々に生じ、ゆっくりとした進行を通じて、その規則に背くことの不都合が繰り返し経験されることによって、[強制力が] 強くなるが、だからといって人間のコンヴェンションから引き出されないことにはならない。反対に、この経験が、利益の感覚が仲間全員に共通のものになったという確信をよりいっそう強め、彼らの振る舞いが今後も規則的であるという信頼を与える。(ibid.)

コンヴェンション論での時間¹⁰⁾ は、所有論や統治論の場合と異なり、一定の幅の中で知覚が継起することに他ならない。また、そこでは、「繰り返されること」が重要であって、時間の「長さ」そのものは特に問題にならないのである。

9) 奥田 2014 では、アダム・スミスとの対比でヒューム道徳哲学の可能性が模索されている。とりわけ、所有決定規則に関するヒュームの論述姿勢の重要性を指摘しているが、その要点は、時間という観点と密接に関連している。

10) 奥田 2012 では、生身の身体をもった者同士がその場に共存することがコンヴェンションの重要な前提であることを指摘しているが、そうした者同士が共存するためには、当然ながら、幅をもった時間の継起のなかに自らが置かれていなければならないだろう。また、矢嶋直規も次のような重要な指摘をしている。「なぜ道徳的でなければならないのかという問題にヒュームが答えていないように見るとするならば、それはまさにその間に合理的な理由を与えることが不適切だからに他ならない。正義の拘束力の本質は、習慣によって形成される規範の自然さと必然性の事実存する。」(矢嶋 2012, 310 頁)

3. むすび——ヒューム的な「時」を求めて

本稿では、ヒューム哲学における時間について、その理論的主著『人間本性論』を繙くことで明らかにしてきた。これまでの議論を敷衍して、ヒューム哲学に含まれる時間的要素は、以下の4つの層に整理できる。

- (T1) ヒューム哲学の限界概念としての形而上学的な時間：観念連合や習慣の形成を可能にする形而上学的前提としての時間。
- (T2) 様々な対象に関する発生論的な時間：抽象観念などの成立のプロセスを描き出す際に常に参照される、一つの軸の上でマッピングされうるような、対象側に流れる物理的な時間。
- (T3) 知覚の継起としての時間：私たちがその観念をもち、それを認知したり間の影響を受けたりする知覚としての時間。
- (T4) 人間社会の歴史的な時間：そのようにあってきたとしか言いようのない一連の連関と必然性の流れのなかで偶発的に生じ堆積し続ける「時」。

道德哲学の文脈で重要になるのは、上記のうち (T4) の時間である。統治論、所有論、コンヴェンション論における時間の位置づけに顕れていたように、個別具体的に積み重ねられてきた来歴あるいは歴史が、様々な社会規範の内容を規定しているが、ヒュームの知覚論の道具立てを前提としたとき、相対主義的でも決定論的でもない、強いて言うならば、個別主義的な時間論がその背後にあることがわかる。それこそが、空間とのアナロジーで視覚的に認知され尺度化された「時間」とは区別される、ヒューム的な「時」に他ならない。このヒューム的な「時」を、上記 (T1) から (T4) が重層的に構成しており、それを背景にヒュームの道德哲学全体が成立している、というのが目下の私自身の見通しである。このようなヒューム的な「時」という時間論的視座から道德や倫理を捉え直すことは、衝突と紛争の絶えないこの世界のなかでいかに生きるべきかを問い直すことにつながるだろう¹¹⁾。ヒュームがコンヴェンションの成立に関して述べたように、私たちは失敗を重ねながら、徐々に、ゆっくりと歩んでいくことしかできないし、また、そうすることが適切なのである。

* 本稿は、2017年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2 による研究成果である。

文 献

- Baxter, D. L. M. [2008] *Hume's Difficulty: Time and Identity in the Treatise*, Routledge.
 Bykvist, Krister [2013] "Time and Morality," in Dyke & Bardon 2013, pp. 549-562.
 Dyke, Heather and Bardon, Adrian [2013] *A Companion to the Philosophy of Time*, Wiley Blackwell.
 Falkenstein, Lorne [2013] "Classical Empiricism," in Dyke & Bardon 2013, pp. 102-119.
 Gill, Michael B. [2014] *Humean Moral Pluralism*, Oxford University Press.
 Hume, David [2007] *A Treatise of Human Nature*, David Fate Norton and Mary J. Norton (eds.), A Critical Edition vol. 1, Oxford University Press.

11) そうした観点からヒュームの道德哲学を解釈したものとして、Gill 2014 がある。

- ヒューム, デイヴィッド [1995] 木曾好能訳『人間本性論 第1巻 知性について』法政大学出版局。
- ヒューム, デイヴィッド [2011] 石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳『人間本性論 第2巻 情念について』法政大学出版局。
- ヒューム, デイヴィッド [2012] 伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳『人間本性論 第3巻 道徳について』法政大学出版局。
- 林誓雄 [2015] 『檻を纏った徳 ヒューム 社交と時間の倫理学』京都大学学術出版会。
- 中村隆文 [2004] 「ヒューム思想における主体性の問題について」『千葉大学社会文化科学研究』第9号, 29-40頁。
- 奥田太郎 [2012] 「コンヴェンション／共感モデルの構想—現代倫理学のヒューム主義へのオルタナティブとして」『アカデミア 人文・自然科学編』第3号, 117-130頁。
- 奥田太郎 [2014] 「ヒュームとスミス—共感と観察者の理論は正義を語りうるか」, 犬塚元編『岩波講座 政治哲学2 啓蒙・改革・革命』岩波書店, 125-148頁。
- 奥田太郎 [2015] 「自然化の行き着く先としての倫理の非自然性—戸田山からウィギンズ, そしてヒュームへ」『中部哲学会年報』第47号, 18-32頁。
- 矢嶋直規 [2012] 『ヒュームの一般的観点—人間に固有の自然と道徳』勁草書房。
- 山口大学時間学研究所監修 [2015] 『時間学の構築Ⅰ 防災と時間』恒星社厚生閣。
- 山口大学時間学研究所監修 [2017] 『時間学の構築Ⅱ 物語と時間』恒星社厚生閣。